

あれから312年

中央義士会報

創立明治41年

平成27年12月発行 No.67

目次

- ・ 易水連袂録について…………… 中島康夫・一
- ・ 梶川與惣兵衛日記と赤穂義人録の整合性…………… 中島康夫・二
- ・ 会員紹介…………… 室井啓太・五
- ・ 元禄十五年十二月十五日の動き…………… 荻原 栄・六
- ・ 業務報告…………… 三輪三郎・十一
- ・ 第十三回忠臣蔵博士試験問題…………… 中島康夫・十二
- ・ 自由広告・今期入会新入会員紹介・編集後記…………… 十五

易水連袂録序

春雨ノ降ク多シク最モノサトキニ終夜
 燈ノ挑ツ書ヲ披キ見メ世ノ人シメトシ百
 今ノ治礼盛衰ヲ考モカリナリ喜シテラ
 有クメ蓋シ表モ亦表盛衰並盛盛衰者
 會者常難榮枯一転覆見カ支ツク端
 改ヲ思ヒシハ吉良俊房ノ両家不意化
 威シ其従士ハ身ヲ白刃ニ貫キまじ道
 路餓死ス嗚呼痛恨ナリ好ク聖ノ我
 白圭ノ缺タシ猶補フヘシ是言テ缺タ補カ
 ス信ノ君子之至戒ナラスヤ難ヤ世ノ人君子
 ノ至戒ヲ恐ルム恣ニ思言ヲ吐同類ノ人
 又一朝ノ怒リシメタエスニラ身ヲ損シ禍絶
 不章ニ従士モ共ニ哀死シテ勝ラ可嘆ヤ
 抑世爾家ノ論シ彼従士ノ始末ノ論スニ
 不始ノ最ノ最モ尤何ヲカシテ不ノ見
 物及ソ記ニ後世ノ又見メ世ノ人ヲ友トスニ
 ノ、為シ書編待ニ最ツカシケレテ下ク弄シ
 文ヲタクニニスルハ予カ喜ミアラス編ニ
 ヲ記ニ後ノ世ノ君子校雠モ為シ書編リ
 侍ル

元禄十五年十二月十五日

易水連袂録原文「序」の部分

上記の写本は、平成二十二年十一月二十三日に名古屋で発見された「易水連袂録」の序の部分です。この写本の特徴は、赤穂義士が切腹してから、僅か一ヶ月後に書き上げた、ある旗本による赤穂事件の記録です。室鳩巢の「赤穂義人録」より六ヶ月も早く脱稿しておりました。現在までも一部は、中央義士会発刊の「赤穂義士史料」に渡辺世祐博士により発表はされておりましたが、今回、当時から秘密裏にされて参りました筆者も、やや判明しましたので、全編を「元禄赤穂事件の記録」として、再版をさせていただきます。この史料は、赤穂事件を解く上で、最も重要な史料であり筆者である、ある旗本は、松之廊下事件より義士たちと交わり、生の情報を得ていたのです。上記の「序」にも示されている通り、事件を冷静に見つめ、一方は、人々を軽んじ、ほしいままに悪言を吐き、その為に身を滅ぼし、一方も怒りに絶えず、家族・家臣を路頭に迷わしたと記しております。更に、その旗本は本書は、後

世の人々のために記録を残したとも書いております。中央義士会としても、決定的証拠が発見されない段階で、筆者を断定しましたのは、百年の歴史で初めてではないかと思えます。何事も真実を証拠でと主張して参りました中央義士会の大勝負でございます。読者のご意見は百パーセントお聞きしますので、是非ご意見をお聞かせ下さい。

「易水連袂録」の筆者は、旗本天野弥五右衛門です。

「元禄赤穂事件の記録」のご注文は

郵便局の払込票で払込下さい。

中央義士会 00130-0-54568

TEL 048-973-3777

1冊 2,200円+送料 350円

「梶川與惣兵衛日記」と 「赤穂義人録」の整合性

中島康夫

既に、筆者は現在まで発刊してきた義士書物で、「梶川與惣兵衛日記」（以下『梶川日記』という）と「赤穂義人録」（以下『義人録』という）の二点を使用して、松之廊下事件を解いてきたが、諸氏によつては疑念を抱く方もお出でかと思慮してきたところである。

以て、今少し、この二点の史料による松之廊下場面の整合性を示して見たい。まず、「梶川日記」であるが、代表的な史料として、世に三点程存在していると認識している。

① 東京大学図書館が所蔵する

「梶川與惣兵衛日記」

（梶川家臣が写した写本）

② 国会図書館所蔵

「梶川氏筆記」

（義士流芳中に治められている写本）

③ 国会図書館所蔵

「梶川氏日記」

（向山誠齋筆丁未雜記中の写本）

以上、三点である。三点共写本ではあるが、それぞれ多少の誤字・加筆はあるが、全体として大きな差はない。

注① ここでいう「差」とは、「堀内伝右衛門覚書」程の差ということである。因に、研究者が「堀内覚書」の写本を研究対象として「義臣對話」などを採用しているが、大きな違いを承知して採用しているのではなく、どれも内容が同じと思ひ込んでいる研究者がほとんどだということをつけ加えておく。全て差異がある。どれが真書に近いか、ご存じの研究者がこの日本に何人いるか。

注② もう一点

俗に、テレビ番組でよく使われる、東京大学史料編纂所で所蔵している「梶川氏日記」は、先に挙げた三つの史料とは違い、単に、東京大学の職員が明治四年頃に、丁未雜記（上記③）から写したもので、史料の価値は低い。以て、研究対象から省く。

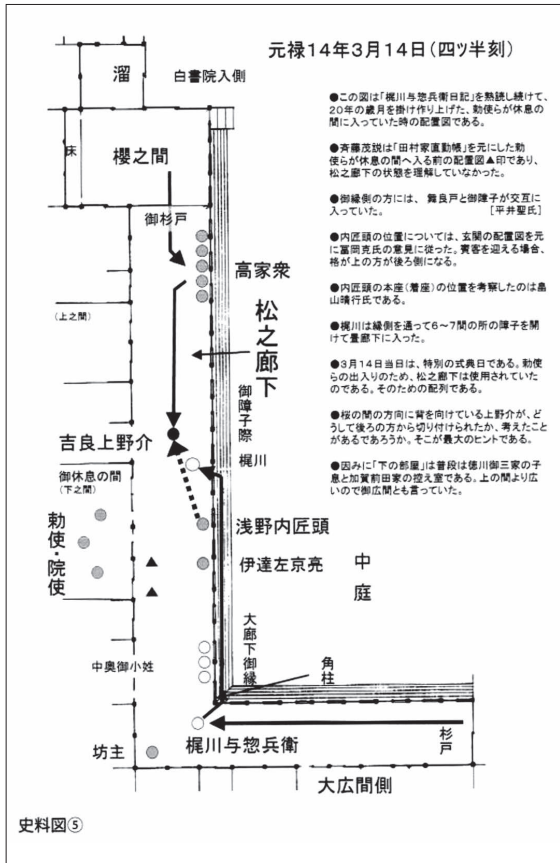
そこで、「梶川日記」と「義人録」の整合性について筆をすすめる。

「梶川日記」

「さて大廊下御縁の方、角柱の辺より見やり候へば、大広間の方御障子際に内匠左京兩人被居、夫より御白書院の御杉戸の間二三間を置き候て、高家衆大勢被居候體見え候間、右の坊主に、吉良殿を呼びくれ候様申候へば、参り候て即立帰り、吉良殿には只今御老中方より御用の儀有之候て参られ候由申聞候、左候はば、①内匠殿を呼参り候やう申し遣わし候處、則内匠殿被参故、拙者儀今日伝奏衆へ御台様よりの御使を相勤め候間、諸事宜しき様頼入由申候、内匠殿心得候とて本座へ被帰候、其後御白書院の方を見候へば、吉良殿御白書院の方より来り申され候故、又坊主呼に遣し、其段吉良殿へ申候へば、承知の由にて此方へ被参候間、拙者大廣間の方御休息の間の障子明て有此、夫より大広間の方へ出候て、角柱より六七間も可有之處にて双方より出あひ、互に立居候て、②今日御使の刻限早く相成候儀を一言二言申候處、③誰やらん吉良殿の後より、声を掛け切付け申候（其太刀音は強く聞え候へども、後に承り候へば、存じの外切れ不申、浅手にて有之候）、我等も驚き見候へば、御馳走人の浅野内匠殿なり、④上野介殿是れはとて、後の方へ振り向き申され候處を又切付けられ候故、我等方へ向きて逃げんとせられし處を、又二太刀ほど切られ申し候、上野其儘うつ向に倒れ申され候」（史料A）

「義人録」

「長矩ら廊廡の下に集りて事を議す。義英マサヒコに問うて曰く、「天使至らば、わが輩いづくにかこれを迎へん。これを階下に迎ふるを宜しと為さんや否や」と。義英曰く、「これらの浅近の事、君なほ知らず、しかもいま期に迫りて急ぎ議す。乃ち衆の笑ひと為ることなからんや」と。たまたま元妃藤原氏、内使を遣はして、恩を天朝に謝せしむ（前に詔ありて元妃を存問せり）。ま



図C 松之廊下配置図

以上、史料Aより松之廊下事件の数分前まで「巻き戻して」みると。梶川は、式典の時間が変更になったと耳にして、吉良に直接会って確かめようと城内を探し回っていた。丁度、松之廊下の角柱までやってきたが、吉良が松之廊下に居なかった。

そこで、①梶川は、松之廊下のやや中央部に座っていた内匠頭を呼んで、式典が終わったら自分に知らせるように頼んだ。内匠頭は、自分の席に戻る。その時、桜の間の方から吉良の姿が見えた。梶川は吉良に会って、再度確かめようと縁側を通り、角柱から六、七間の所の障子を開けて松之廊下へ入った。

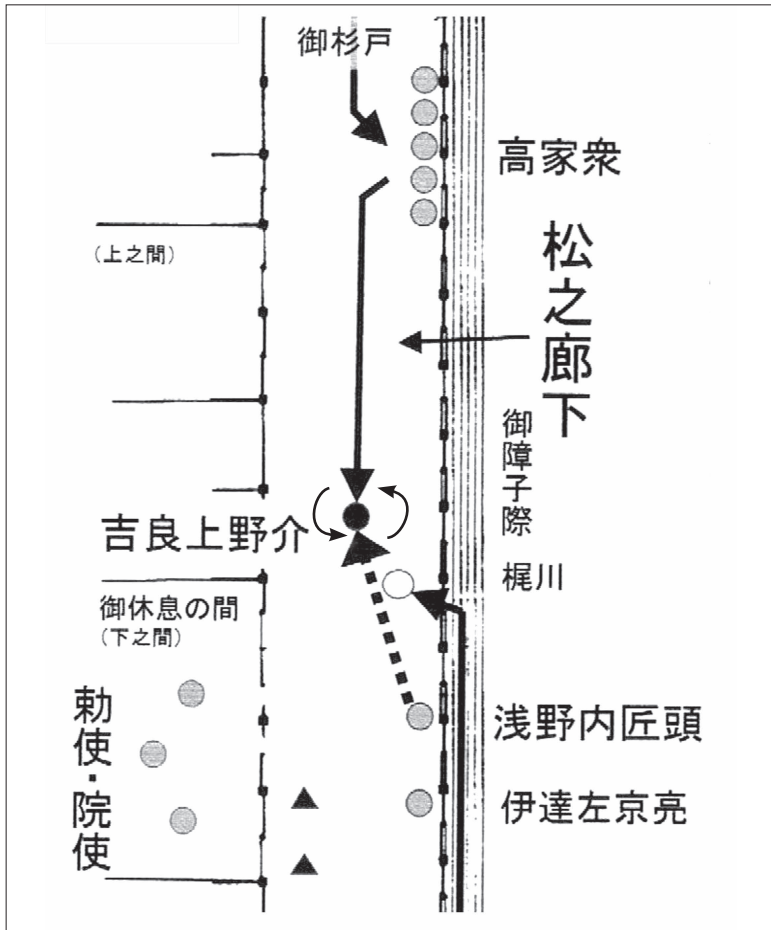
井紫郎氏 漢訳(史料B)

〔義英は義央が正しい〕

「義英は義央が正しい」

と、史料Aより松之廊下事件の数分前まで「巻き戻して」みると。梶川は、式典の時間が変更になったと耳にして、吉良に直接会って確かめようと城内を探し回っていた。丁度、松之廊下の角柱までやってきたが、吉良が松之廊下に居なかった。

そこで、①梶川は、松之廊下のやや中央部に座っていた内匠頭を呼んで、式典が終わったら自分に知らせるように頼んだ。内匠頭は、自分の席に戻る。その時、桜の間の方から吉良の姿が見えた。梶川は吉良に会って、再度確かめようと縁側を通り、角柱から六、七間の所の障子を開けて松之廊下へ入った。



図D 松之廊下拡大図

恐らく、この時の松之廊下の雰囲気は、勅使方三名も下の間に入り、荘厳な空気が流れており、梶川も廊下の真ん中を通るわけにもいかず、縁側を通ったものと思われる。

それを示すのが「図C」である。元々「図C」も「梶川日記」を長年分析して、できあがった図である。

先覚斎藤茂氏によって、松之廊下の配置図が、その著書「赤穂義士実纂」に示されてから四十年、ようやく「図C」まで辿り着いた。

だが、斎藤茂氏が示した図は、勅使方が部屋へ入る前の配置図であったのだ。「図C」の通り、内匠頭は勅使方三名が休息の間より出てくるのを、その下の間の襖より縁側の障子際に移動して待っていたのである。

そこへ、内匠頭の右後方縁側の障子を開けて、梶川が畳の間(松之廊下)へ入ってきた。そこが、角柱より六・七間(約十一メートル)のところ、正に、刃傷事件の現場になる所なのである。その場面を拡大すると図Dのようになる。

梶川は、やや斜めに立ったまま、内匠頭に背を向けた状態で吉良に話し掛ける。

「只今、浅野様に式終了の時刻をお願いしました」

と、告げたとたん、吉良の内匠頭いびりが始まった。

①「梶川殿、頼み事は私にしなさい。そうしないとしくじるよ」

その瞬間、内匠頭は顔色を変えて立ち上がった。

その態度を見た吉良は、踵(きびす)を返してやや右後方の高家衆に向かつて、

②「田舎者は、終始しきたりを仕損ずる。また、勅使方に失礼があるかも……」

と言いつつ放った。

その瞬間、内匠頭は梶川の後の方、吉良に取っても後の方(図C)より、③

吉良の頭上めがけて、小さき刀を振り下ろした。

この時、内匠頭の「上野介め！」の一声で、後の高家衆から、梶川の方へむ

き直した瞬間、所謂、吉良が内匠頭に正面を見せたところに、④内匠頭の小さ

刀が吉良の額をかすった。驚いた吉良は「これは」と言いながら、また踵を返

し、高家衆の方へ逃げた。梶川は、自分の後の方から、内匠頭が迫ってきたた

め、最初気がつかなかった。誰かと思つて見たら、内匠頭であった。内匠頭は

小さき刀を四度振り回したところで、梶川の左腕が内匠頭の右腕にからんだので、

そのまま畳みに押さえつけたのが事件のあらましである。

ところが、梶川は、松之廊下での内匠頭と吉良の言葉のやりとりを「一言一言」と、自分の日記に抽象的にしか記述していなかったためである。

ここが大きな鍵であり、問題なのである。

後に、梶川は「梶川日記」で吉良とは親友なので、内匠頭を止めてしまった。

武士としては討たせてやれば良かったと、後悔の念も記している。

従つて、梶川が先に示した「一言一言」も、武士として余りにひどい雑言だった

ので、つまり、「赤穂義人録」に示してある通りの雑言であったために「梶川日記」にはそのまま書けなかったのである。

一方、室鳩巢の使命を請けたレポーターは、現場を見ていた茶坊主あたりから、

事の子細を正確に聞き出していたのである。つまり「梶川日記」の不備を「義人録」

が正確に埋めていたのである。

史料中記号を以て示してあるので符号していただきたい。

「梶川日記」は、内匠頭を抱き止めた本人の自筆である。筆記は、十四日か

あるいは十九日までには記録されていると見てよい。

「義人録」は、事件後室鳩巢の指令を請けたレポーター杉本義鄰が、現場を

目撃した表坊主当りから聞きだした記録である。

そして、「梶川日記」と「義人録」の事件現場の証言は、同文であることは

内容を把握すれば自然と解つてくることである。

つまり、「梶川日記」の内容を「義人録」が後追証明しているのである。

その整合性の一部は、次の如くである。

「梶川日記」の符号①と「義人録」の符号⑥の部分であり「巻き戻し」の①

である。

次に「梶川日記」で示す符号②の「一言一言」が「義人録」の⑩の部分である。

つまり、「巻き戻し」の③になる。

更に、「梶川日記」③の部分が「義人録」の⑦になる。「巻き戻し」では、③

になる。

続いて、「梶川日記」の④の部分は「義人録」の⑧になる。「巻き戻し」では

④の記号になる。

以上のように、部分部分の梶川の動き、内匠頭の移動、吉良の言動が、「梶

川日記」と「義人録」の両史料が一致、あるいは、補助することによつて、「梶

川日記」の「一言一言」以外には策意文は見られない。つまり、内容は信用で

きるということである。勿論、「義人録」も全体的に見れば、間違いは発見で

きるが、「松之廊下」の部分の箇所は、正確に取材していると判断してよい。

決定的証明は、「義人録」の「列に言いて曰く」の記述である。列とは、吉

良の後方に着座していた「高家衆」のことである。その為、吉良は半回転(図D)

して、梶川や内匠頭に背を向けた瞬間があり、内匠頭の呼び声に、向き直した

のである。従つて、吉良は内匠頭に額を向けたのである。内匠頭の一刀目は額

に向けられたことになる。

以上の論理をもつてすれば「梶川日記」の内容は、「一言一言」省略を抜けば、

事件の物理的内容は正確であり把握できる。

また「義人録」も、室鳩巢が監修したことにはなっているが、恐らく、藩主

の前田綱紀の指令があつたものと推測しているが、その事実を掴めれば、研究

者の冥利に尽きる。

会 員 紹 介



僕と元禄赤穂事件

むろいこうた
室井孝太
(中学校1年生)

ちの意見に流されず、じつくりと待ったこと、本当に討入りの気持ちがあるかどうかを確かめるための「神文返し」など、大石内蔵助が討入りまでの間に進めた準備は、数えきれないほど多くあります。その準備の用意周到さから、討入りを必ず成功させるという気持ちを強く感じます。

入会した時は、小学生だったので毎月勉強会に行っていました。最近では中学の部活(剣道)が忙しくなってしまう、勉強会にあまり参加できないのが残念です。でも元禄赤穂事件を勉強したい気持ちは以前と変わらずにあるので、日程が合えばいつでも行きたいと思っています。

これからは、中学生としての部活や勉強と、元禄赤穂事件の勉強とを両立していきたいと思えます。

あっ、思い出しました。月一勉強会に出席した時、中島理事長に言われました。

「これから大学(史学部)へ入って、古文書が読めるようになって、目上の人を小バカにするような、小生意気になるなヨ。」と。

僕は、小学校一年生の時から日本史が好きでした。その頃は元禄赤穂事件の事は知りませんでした。その後も日本史がずっと好きで、小学校六年生の時に図書館で歴史の本や伝記をかたづけばから借りていました。もう借りる本がなくなったら、「大石内蔵助」という題名の本に出会いました。特に何の期待も持たないで読んでみました。すると、赤穂義士四十七士を率いた大石内蔵助という人物の手柄に驚嘆してしまい、一発で気に入ってしまいました。それからは大石内蔵助のファンになりました。

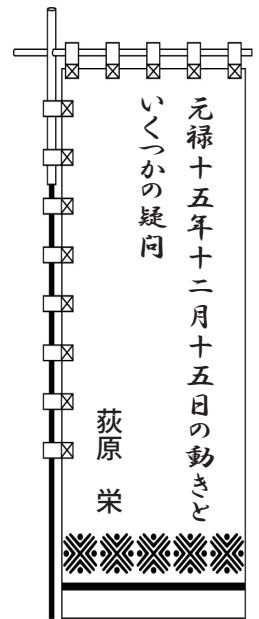
それから元禄赤穂事件の本をいろいろと探していると、図書館で、ある本を見つけました。その本は、「大石内蔵助の生涯」と書いてあります。作者の名前には「中央義士会」と書いてありました。そのときに初めて中央義士会の存在を知りました。僕は、この本を欲しかったのですが、図書館で借りていたため、一時的にしか手元にありませんでした。ですが、どうしても欲しいと思い、この本を調べてみました。でもどこにも売っていない

だったので、中央義士会のホームページを見たところ、買えるようだったので、母に電話をしてみました。しかし母ではなく、僕本人と話がしたいとのことで、今度は、僕が勇気を出して電話をしました。今思えばその方は、中島理事長だったので、月一回の勉強会があるということを知って、誘っていたいただきました。その時はまだ小学6年生だったのですが、勉強してみたいと思う気持ちが強く、行ってみることにしました。行ってみると、大人の方ばかりで難しい話も多いのですが、今まで知り得なかった覚書や浪士のことなどを勉強することができ、ためになります。

僕が、元禄赤穂事件の中で強く印象に残っていることはたくさんありますが、特に思うのは、筆頭家老大石内蔵助の性格や行動力です。例えば、浅野内匠頭が刃傷事件を起こしたその後の、大石内蔵助の判断と浅野家再興を願う行動です。赤穂城に籠城か開城かなど、いろんな意見が割れるなか、開城を選んだ大石内蔵助がすごいと思います。また、そのほかにも、江戸急進派の堀部安兵衛た



剣道の試合中



赤穂義士の吉良邸討入りは、元禄十五年十二月十四日の寅刻から卯刻の間に行われた。現在の時刻でいえば、十五日の朝四時から六時にかけてである。そして夜中の二十三時に、四つの大名家に引き取られて、一日が終わるのである。

赤穂義士の討入りに伴い、上杉家、吉良家の隣家土屋主税家、大目付仙石伯耆守など多くの関係者が動いている。しかし、老中土屋相模守は、事件を早朝に知りながらなぜか動かなかつた。また、將軍綱吉への事件の報告は、御側用人柳沢吉保が行ってはいない。さらに、赤穂義士の事情聴取と四大名家への引き渡し場所が、評定所から泉岳寺に、そして仙石邸へと午前中の間に三回も変更された、などいくつかの疑問がある。これらに注目しながら時系列で当日の動きを見ていくことにする。

時刻は史料に書かれたものを使用し、分かりやすいよう現代時間に直すが、歩いたり走ったりした距離と時間から推定する場合もある。その場合は、次のように考える。両国吉良邸から泉岳寺まで、現在の地図上で赤穂義士が通ったルートを見ると、十二・〇kmである。赤穂義士が吉良邸を出発したのが、朝六時ころ、泉岳寺に着いたのが八時半から九時の間くらい、約三時間で十二・〇kmを歩いたことになる。これは時速四kmに相当する。実際には、吉良邸を出て回向院に向かったが入れなかったために、そこで時間を使い、さらに両国橋で休憩し、所々

で白湯を飲むなど歩みを止めているので、もう少し早く時速四・五km程度で歩いたと推定する。早足の場合は、時速六km、使いのため走った場合は、時速七kmと想定する。なお、史料に現れている江戸時代の時刻は、おおざっぱなので、書かれている時間は現代のように正確ではない。したがって、以下に記載の時刻には、ある程度の幅があることをお断りしておく。また、時刻に「四・三〇ころ」と「ころ」が付いている場合は、前後の状況や歩く速度などから推定したものである。

四・〇〇 四十七士、吉良邸討入り開始。

「元禄十五年十二月十四夜・寅ノ上刻」(富森助右衛門筆記)、「十二月十四日夜七ツ前に三力所から出発」(寺坂私記)、「寅上刻吉良上野介殿屋敷え罷越候」(江赤見聞記)。「去十四日夜八ツ半時過」(野本忠左衛門書状)。「元禄十五年十二月十四月ノ夜 寅ノ上刻」(易水連袂録)。また、吉良邸と隣り合った土屋主税家、牧野一家、本多孫太郎家からこの事件について幕府に口上書が出されており、それらでは「七ツ時」に吉良邸に討入りがあった旨報告されている。

四・三〇ころ 土屋主税から老中土屋相模守へ討入りの連絡が走る。

土屋主税家の竹中楯司が残した「元禄実記」に「昨夜中相模守様え笠井権兵衛御使者被遣候」とある。富森助右衛門筆記に「一五日朝主税様より御注進御座候由」とあるので、富森が朝から晩まで留まっていた仙石邸か、預けられていた細川邸でこのことを聞いたものと考えられる。これによって土屋主税から土屋相模守などへの連絡が、江戸城内では公になっていたことが分かる。

四・四〇ころ 吉良邸近くの豆腐屋が上杉家上屋敷へ走る。直ぐ後から吉良家の足軽丸山清右衛門が同様に伝える。

豆腐屋が上杉家に到着した時間から逆算して、このころ出発と推定。

五・一〇ころ 土屋家の使いが老中土屋相模守宅着。

吉良邸隣の土屋邸から老中土屋相模守宅まで四km。使いは四〇分ほどかけて土屋相模守の屋敷に行ったと推定。

五・三〇 豆腐屋が上杉家上屋敷到着。すぐ後から吉良家の足軽が到着。上杉家では、人数を集めるため、中屋敷と下屋敷に人を使わす。

「十五日明六時前御上屋鋪御門迄本所に罷在候とうふ屋」(野本忠左衛門書状)。「十四日夜中七時半本所・・・たうふ屋東御門へ参り今夕八時半左兵衛様御屋敷へ浅野内匠家来百五十人ほど夜討ち」(大河原文書)。

六・〇〇 吉良邸から上杉家上屋敷まで五・九km。赤穂義士吉良邸を出る。

「元禄十五年十二月十四日夜寅刻少シ前隣屋鋪吉良左兵衛工 浅野内匠頭家来中夜込仕卯ノ刻二退申候」(元禄実記)。「富森助右衛門筆記に「引払候時刻は未透と明はなれ不申候」、寺坂私記にも「引拂候刻 未透と明はなれ不申候」とあるので、引揚げは、明け六つ前である。この時期の明け六つは、今の時間で六時十分ころ。六・〇〇ころ 上杉家から第一陣として三人の物見が吉良邸に向かう。

六・〇〇ころ とうふ屋からの連絡で、上屋敷内で人を集めるのに三〇分ほどかかったと推定。

六・〇〇ころ 土屋主税家より、老中土屋相模守とお目付近藤平八郎、若年寄本多伯耆守へ浅野家来

が引揚げたことを伝える。

「内匠頭殿家来引候と早速御目付近藤平八郎殿へ・・・御支配方御用番本多伯耆守様え・・・相模守様え・・・」(元禄実記)。

六二〇〇ころ 赤穂義士両国橋辺に居る。

回向院で寺側とやりとりがあることと、両国橋で休んでいたの、このころは両国橋にいたと考えられる。佐藤條右衛門が赤穂義士と別れ米沢町へ帰る。

六三〇〇ころ 上杉家から医者を含め、第二陣の三十七名が吉良邸に向かう。

大河原文書、野本忠左衛門書状より、上屋敷で人を集め、準備をするのに一時間程度はかかったと推定。

六五〇〇ころ 上杉家の第一陣の物見が吉良邸着。赤穂義士の姿は探したが見えず。

歩く速度から計算すると、このころ赤穂義士は、永代橋あたりに達していた。

七二〇〇 赤穂義士鉄砲洲の元浅野家上屋敷前を通る。

吉良邸から元浅野家上屋敷まで五、一kmなので七時一〇分ころ通ったと考えられる。「一五日の朝六つ過に御門前通り申し候」(奥平家桜井惣右衛門書状)。奥平家は鉄砲洲の元浅野家上屋敷の手前にある。

七二〇〇ころ 上杉家の二陣が吉良邸着。

七三三五 赤穂義士新橋辺。吉田と富森が大目付仙石伯耆守へ自訴に向かう。

「十二月十五日之朝六ツ半時過無縁寺より新橋辺ならん・・・直に吉田忠左衛門富森助右衛門両人大目付仙石伯耆守殿久尚御宅に罷越」(江赤見聞記)

元浅野家上屋敷から新橋まで二、二km。

七五〇〇 吉田と富森、仙石邸に到着。

「朝五ツ前に事ゆえ」(江赤見聞記)。「十五日朝六ツ半時分」(易水連袂録)。

吉田と富森は早足で向かったと推定。新橋から仙石邸間は一、六km。

八〇〇〇ころ 仙石伯耆守自宅を出発し、月番老中稲葉丹後守邸へ向かう。

八三〇〇ころ 仙石伯耆守、稲葉丹後守邸着、対処方を相談しその足で登城。

仙石邸から稲葉邸まで二、二km。

八四四五 側用人柳沢吉保と松平右京大夫はこの時分は自宅にいた。

大工頭の鈴木修理がお礼のため、柳沢邸と松平邸に寄り挨拶しているので、この時、柳沢と松平は自宅に居たことがわかる。

「辰后刻美濃守殿右京大夫殿へ御礼ニ参直ニ登城」(鈴木修理日記)

九〇〇〇 赤穂義士、泉岳寺着。

「十二月十五日之朝五ツ過ぎ」(江赤見聞記)。「五ツ半」(義士実録)(易水連袂録)。

泉岳寺には、朝の八時半から九時の間に着いている。全員直に浅野内匠頭の墓前に行く。

九〇〇〇ころ 仙石伯耆守登城。

稲葉邸は大手門近く。

九三三〇ころ 老中たちで赤穂義士の処遇を検討し、老中が直接將軍綱吉に報告する。

九四五〇ころ 畠山下総守が上杉家に使いとして出発。

十時に畠山が上杉家上屋敷に着すると、このころ畠山が江戸城を出発したと計算できる。江戸城から上杉家上屋敷まで一km。

十〇〇〇 畠山下総守が上杉家に使いとして来る。

畠山が上杉家上屋敷に来て、浅野家家来が屋敷前を通るが、親の敵として討手を差し向けてはならない、と老中の下知を伝えている。この時は、赤穂義士を評定所へ呼ぶ予定だった。「十五日朝飯後御書付被仰渡候趣」として「少し以前二畠山下総守殿御出被申聞候ハ・・・浅野殿家来四十七人御評定所へ被召出候而詮議に候然は彈正殿屋敷前罷通り親之敵と而」(大河原文書)。

「二五日巳の刻畠山民部大輔(ママ)を以て上杉彈正大弼え老中より謂越」(忠誠後鑑録)。

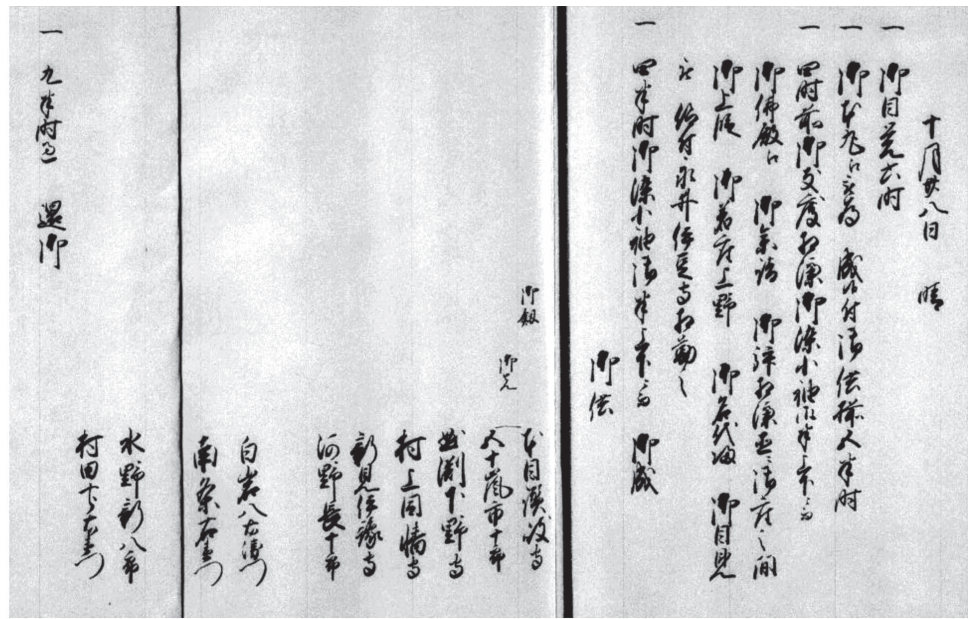
十一〇〇〇 柳沢吉保は嫡男の吉里とともに登城。十二月一日に吉里が侍従に昇進したので、そのお礼を御座の間で將軍綱吉にする。

源公実録では御平日之御事として、「日々朝四ツ時御登城・・・八ツ時御退出」とあり、通常、柳沢は朝十時ころ登城して十四時ころ退出していたことがわかる。

柴只堂年録の十二月一日の項に、柳沢は吉里と一緒に登城し、吉里の昇進のお礼を將軍綱吉に御座の間でしたことと、この披露を若年寄の井上大和守が行い、稲葉丹後守も同席していたことが記載されている。

將軍の行動を残した日記として、奥御日記がある。現在残っている奥御日記は国立公文書館に、宝永時代のものが一部あるだけだが、綱吉が將軍だった宝永五年のものも残っている。それによると、大体いつも一定で、月次の御礼日は、起床が六つ時(六時)、五つ半(九時)に支度を済ませ、この後御仏殿に行きお参りした後、四つ(十時)に御座間に出てお目見え、四つ半(十一時)に表へ向かう。柳營日記では、大広間へのお成りはいつも定刻で午刻(十二時)に大名の御礼を受けることになっている。

十一〇〇ころ 泉岳寺から寺社奉行に届けが出る。



宝永 5 年 10 月 28 日 (月次の御礼日) 奥御日記 (国立公文書館)

この時、白明が人数を数えると四五名、その後再度名を改めて人数を数えると四四名、寺坂吉右衛門がいことが判明(白明話録)。寺坂聞書覚にも「十二月十五日の朝四ツ時分惣連中

へ立ち別れ候」とあり、寺坂吉右衛門はこの頃、皆と別れたと考えられる。

十一〇〇 泉岳寺の大石らは、浅野内匠頭の墓での拝礼が終わって、寺の建物に入る。

「最早四ツ時半時過テモ有事ナリ拜相済テイツレモ寺へ参ラル」(白明話録)

赤穂義士は、二時間近く内匠頭の墓の前にいたことになる。

十一〇〇 毛利甲斐守が仙石伯耆守から、江戸城大広間において、赤穂義士十人を泉岳寺に引き取りに来るよう命じられる。

「四ツ半時於大広間仙石伯耆守久尚・・・御預被成候」(毛利家記録赤穂浪人御預之記)。細川、水野の各大名も同時に申し渡される。府中候留書では、大廊下中程で大目付仙石伯耆守より申し渡されている。

十二〇〇 將軍綱吉が大広間で大名から月次の御礼を受ける。

十二〇〇 松平隠岐守の所へ、月番老中稲葉丹後守より、泉岳寺に浅野内匠頭家来を受け取りに来るよう、連絡が来る。

「午之刻御月番之御方様御連名奉書到来」(聞書松山藩赤穂御預人始末)。他の細川家、毛利家、水野家はお礼日で登城していたため、江戸城内で赤穂義士の引き取りを命じられる。引き渡しは泉岳寺で、仙石伯耆守とお目付は、泉岳寺へ行くことになっていた。

江戸城から松平隠岐守邸まで二、四 km なので、老中の奉書は、十一時半ころ江戸城を出発したと考えられる。

十二〇〇 毛利家泉岳寺に受取人数を送り出す。「昼九時芝泉岳寺へ馳参」(毛利家記録赤穂浪

人御預之記)。

十二三〇 仙石伯耆守が一旦屋敷に帰ってくる。五十人分の料理を用意するよう言いつけて、また登城する。

「昼九ツ半御帰り五十人前之料理被仰付候又御出被成」(江赤見聞記)。

泉岳寺において赤穂義士を四家に引き渡す予定だったが、一旦仙石邸に呼んでそこで引き渡すことに変更した。仙石伯耆守が江戸城を出たのは十二時ころと考えられる。

江戸城から仙石邸まで二、四 km。

十三三〇 吉良邸に御目付二人来る。土屋主税も吉良邸に行き昨夜の話をする。

「八ツ時過かと覚申候」「御目付衆安部式部、杉田五左衛門が来て書院で吟味」(野本忠左衛門書状)。「十五日昼頃御目付安部式部、杉田五左衛門殿御隣家へ検使二御出・・・殿様御隣へ御越被成」(元禄実記)。

十四〇〇 仙石伯耆守が自宅に帰ってくる。泉岳寺に歩行目付三人を使わす。

「八ツ過御帰被成・・・我等よりも御歩目付三人申付遣し申候」(江赤見聞記)。

仙石邸と江戸城の間は、往復で一時間程かかる。仙石伯耆守は十二時半に戻ってきて、また江戸城へ行き、短時間で用事を済ませて自宅に帰ってきたことになる。

十四〇〇 松平家から泉岳寺へ赤穂義士の受取人数を出す。

「請取之御人数未中刻左之通被遣之」(久松家赤穂御預人始末記)。

十四〇〇 毛利家に仙石伯耆守から預け人は仙石邸へ渡すとの連絡あり。

毛利家記録赤穂浪人御預之記に「同日八ツ時・・切紙将来る」とあり、引き渡し場所を泉岳寺から仙石邸に変更する旨の連絡があった。この連絡の時に使いで来た御徒目付が、公儀も上杉を心もとなく思っているので、その覚悟で途中念を入れ引き取るように、と伝えている。江戸城から毛利邸まで、五・二km。使いは十二時半から十三時の間くらいに江戸城を出たと考えられる。

この間に、佐藤條右衛門と甚三郎は泉岳寺に着く。佐藤條右衛門覚書に甚三郎を連れて泉岳寺に着くと、大名から遣わされた人数が大勢いた旨記載あり。また、徒目付が泉岳寺に来た様子の記述があるので、その前には佐藤條右衛門と甚三郎は着いていた。

十五：〇〇 泉岳寺に歩行目付到着。

「八ツ半過仙石伯耆守殿より為御使」（江赤見聞記）。仙石伯耆守より泉岳寺へ使いが来て、夜討ちの様子は吉田と富森から聞いたが、さらに詳しく聞きたいので大石らは仙石邸へ来るように、との連絡だった。

泉岳寺から仙石邸まで4kmなので、使いは十四時十分ころ出発している。

十五：三〇 仙石伯耆守から松平家に赤穂義士の受取は、仙石邸で行う旨の連絡が来る。

「申ノ下刻過仙石伯耆守様より如左御切紙到来」（聞書松山藩赤穂御預人始末記）。「七ツ過伯耆守並源五右衛門殿御連名之御手紙隠岐守殿上屋敷之被遣候」（江赤見聞記）。

十六：〇〇 大名家の請取りが仙石邸に集まる。

「七ツ過総人数引取り伯耆守殿宅へ罷越門前に詰掛」（易水連袂録）。

十七：一五 大石らは仙石邸に向かうため、泉岳寺方丈に礼を言う。

「先寺へまいられ衆士列座方丈へ内蔵助段々丁寧に礼を述べらる・・最早暮れ六ツ時なり」（白明話録）。この時期の暮れ六つは十七時十五分ころ。

二十：〇〇 赤穂義士泉岳寺を出発。

「泉岳寺被出候節十五日の夜五ツ少し過申候由」（義士実録）。「戌之上刻寺を罷出伯耆守様へ参候」（富森助右衛門筆記）。

二二：〇〇 赤穂義士、仙石邸に着く。

「戌之下刻御預ケ之者一同に伯耆守殿へ参候」（江赤見聞記）。

大石らは仙石伯耆守から事情聴取を受ける。佐藤條右衛門と甚三郎は、泉岳寺からここまで赤穂義士と同道し、しばらく仙石邸の辺りを見廻つてから分かれる。

二三：〇〇 仙石邸で大名に赤穂義士を引き渡し開始。

最初に細川家、次に松平家、毛利家、水野家の順。「夜二入亥之下刻請取来候」（聞書松山藩赤穂御預人始末記）。

二四：〇〇 仙石邸で松平家大石主税以下十名を受け取る。

「夜子刻大目付仙石伯耆守殿宅に於て左の通請取之」（松山叢談）

二四：〇〇 佐藤條右衛門米沢町の堀部弥兵衛宅に戻る。

「弥兵衛町宅の米沢町へ夜九つ時分罷歸」（佐藤條右衛門覚書）。泉岳寺と一緒に来た甚三郎は姿を消し、翌朝米沢町に戻ってくる。

二二：〇〇 松平家に赤穂義士十名着。

「夜子刻大目付仙石伯耆守殿宅に於て左の通請取之 同下刻愛宕下上屋敷へ到着」（松山叢談）。

二二：〇〇 毛利家に岡嶋ら十名着

「八ツ前御屋敷へ預人召連罷歸候事」（府中候留書）。

以上時系列でできごとを見てきたが、初めに書いた疑問点について考察していく。

①老中は討入り直後に事件を知ったにも関わらずなぜ動かなかつたのか

老中土屋相模守は討入り直後、上杉家よりも早く事件を知ったと思われるにも関わらず、動いていないのである。

土屋相模守が赤穂義士の討入りの連絡を受けてから、赤穂義士の泉岳寺入りまで約三時間はあった。仙石伯耆守が江戸城に出仕し、老中と対策を協議しているが、それまで何も動いていないのである。上杉家では、物見を出し次いで追討の侍も出している。お目付の近藤平八郎も、若年寄木多伯耆守も同様に動いていない。今のところ理由を示す直接的な史料はみあたらないが、幾つかの可能性が考えられる。

最も考えられるのは、浅野内匠頭が切腹し、赤穂浅野家が改易になったにも関わらず、吉良上野介がお構いなしであったことについて、老中たちが浅野に同情していたことである。

大垣戸田家の当主戸田采女正氏定は、浅野内匠頭の従弟にあたり、浅野家の改易の時には、尽力をつくしている。その戸田家が残した「赤穂御用日記」の元禄十四年五月十日の項に、五月九日に土屋相模守のところへ戸田采女正が挨拶に行った時、内匠家来大勢の者は不便に思う、と言われたことが書かれている。三月十四日の処分につ

いては綱吉の決定なので従わざるをえなかったが、実際は浅野に同情していたのである。それによって、今回の事件については、内心拍手を送り、表向きは積極的な行動には出ず、大きな騒動にならないように、上杉家を押さえるなどの処置程度に抑えたのではないかと。

もう一つ、戦いのない平和な社会になれてしまった老中は、四十七士が自訴を行い泉岳寺に留まっていたことに、ほっとし、ついでに、泉岳寺で切腹でもしてくれたら面倒なことにならず、一番簡単な解決方法だ、と考えた可能性もある。

② 將軍綱吉への討入り報告は老中から直接行われた

三月十四日の松之廊下事件の時は、柳沢吉保を通して綱吉に伝わったが、十二月十四日の討入りは、老中が直接綱吉に報告している。この日、柳沢にとつて最優先事項は、息子吉里の昇進のお礼を綱吉にすることにあり、午前中はほとんど事件に関われなかったと考えられる。楽只堂年録の十二月十五日の記述の大半は、昇進の御礼とお祝いに関したもので、それから、このことがうかがえる。

実際に討入りの情報が江戸城に届き、老中が協議をして綱吉に伝える時には、柳沢はまだ登城していなかったのである。

③ 赤穂義士の引き渡しは評定所から泉岳寺、そして仙石邸へと三度変更

当初は、赤穂義士の詮議を評定所で行う予定であったが、その後、泉岳寺で事情聴取を行い、大名に引き渡すことになり、さらに仙石邸での事情聴取と引き渡しに変更された。

楽只堂年録の元禄十五年十二月十五日に「泉嶽(ママ)寺は、長矩か墓の有る所なれば、翌朝、此寺まで立ちのきて御仕置を待てり、然るに仰有て、四十六人(ママ)を仙石伯耆守が宅に召して・・・に御預けにて、御仕置

を待しめたまふ」とあつて、將軍綱吉が泉岳寺の赤穂義士を仙石邸に呼び、そこで大名四家に引き渡すよう命じている。

また、江赤見聞記に「伯耆守申候は各被仰合吉良上野介殿宅へ夜討之様子先刻吉田忠左衛門富森助右衛門物語にて致承知候得共猶又可承子細御座候間、各御同道只今私宅へ可被参由被申候」とあるので、大石からも詳しく事情聴取をすべきと判断して、仙石邸に呼んだことがわかる。そのため、泉岳寺から仙石邸までの道筋は警戒されており、富森助右衛門筆記に「道筋町二ても警固之心在之体御やしき方も御門前に桃灯御出し張番等少々相見へ候」とある。佐藤條右衛門覚書にも「泉岳寺より仙石伯州殿迄之道筋何の替る事も無之町屋ハ門戸を閉ひそひそいたし候武士屋敷ハ辻堅め杯出高桃灯杯燈有之所も相見へ候」とあるので、幕府側も用心していたことは確かである。

これらから次のことが見えてくる。

十五日の朝、自訴を受けた仙石伯耆守が、稲葉丹後守邸へ立ち寄り、対処を相談。二人が登城し、老中間で協議。赤穂義士を評定所へ呼び、そこで、事情聴取と処分を決める事にした。そして赤穂義士の吉良邸討入りと処分について急いで綱吉に報告。

その後、御座間で綱吉が、柳沢吉保らのお目見えを実施。老中もこのお目見えには同席していたため、終了後、再度老中間で協議。報告の時、綱吉が赤穂義士寄りの態度だったので、処分が長引くことと、評定所へ赤穂義士を呼ぶと、途中に上杉家上屋敷があることなどから、事情聴取を泉岳寺で行い、ひとまず赤穂義士を大名家に預けることに決定。預ける大名を選定し、四つの大名家に通知した。四大名家は急いで受取人数を泉岳寺に派遣。しかし、綱吉が大広間での大名の御礼を受ける直前の、

十一時半から十二時の間で、その処置を綱吉に伝えると、綱吉は赤穂義士を仙石邸に呼び、そこで大名に引き渡すよう命じた。仙石伯耆守は急遽四大名家に変更を連絡。泉岳寺に集まっていた各大名家も急いで仙石邸に向かった。

ここで再び疑問である。綱吉はなぜ赤穂義士を仙石邸に移動させたのか。泉岳寺から仙石邸の間にも上杉家下屋敷がある。確かに幕府側も道筋は用心していたが、その道中は幕府の護衛も、大名の護衛もなく、ただ、泉岳寺の坊主の先導と赤穂義士だけだったのである。

これについても直接的な史料はなく、確かなことは言えないが、綱吉の性格から、次のように考えられる。道中の危険などについては、何も考えてはいなかった。預かりの四大名家は、泉岳寺近くに屋敷を持っているため選ばれており、泉岳寺での引き取りが最適なのは確かである。その老中の決定を覆すことは、何事も自分で決めなければ気の済まない綱吉の気まぐれにすぎず、自分の権力を思い知らせ、さらに、忠孝を具現化した赤穂義士の行為を、自身も認めていることを公に示して、それを誇りたかつたのである。

一方、綱吉は、上杉家が赤穂義士を襲つてくれないかと考えていた節もある。主君の仇を討った赤穂義士と、親の仇を討った上杉家という、忠孝に励んだ二つの事件が、儒者を自負する自分の治世で出たことを自慢できるだけでなく、上杉家を改易し、將軍の威信を世に知らしめることができるのである。蚊をつぶしただけで旗本が閉門になる法を作り、歴代の將軍中、最も多く大名家を潰した人物である。このくらいは考えた可能性も捨てきれない。

平成27年 中央義士会 業務報告

担当 三輪三郎

年 月 日	項 目	備 考
H27.1.11	第65回月一勉強会 ①易水連袂録名古屋で再発見 ②菅谷半之丞について	港区生涯学習センター
1.24	旧細川邸(大石内蔵助ら切腹の地)掃除	中島理事長ほか10名参加
1.29	第6回みんなの忠臣蔵 江戸前21(赤坂見付→氷川神社)参加	三輪評議員
1.30	第1回静岡支部勉強会	中島理事長
2.1	第14忠臣蔵愛好会 赤穂義士引き揚げルートを歩く会	中島理事長
2.4	赤穂義士命日 泉岳寺参詣	富岡副理事長
2.15	第66回月一勉強会 ①大石瀨左衛門について ②読付「武庸筆記」続き	港区生涯学習センター
2.19	赤穂市市史編纂室へ古文書(123冊)送付(第1回)	中島理事長
2.21	ニュースなぜ太郎(テレビ朝日)泉岳寺マンション建設;堀部安兵衛からの手紙	中島理事長
2.28	第2回静岡支部勉強会	中島理事長
3.10	浅野内匠頭追憶の集い(浅野内匠頭三百十五回忌)	泉岳寺
3.31	第3回静岡支部勉強会	中島理事長
4.5	第67回月一勉強会 ①富森助右衛門 ②読付「武庸筆記」続き	港区生涯学習センター
4.5	旧細川邸(大石内蔵助ら切腹の地)等見学	富岡副理事長
4.26	第15回忠臣蔵愛好会 不忍池から浅草寺まで=新しい忠臣蔵	中島理事長
5.7	赤穂義士「凱旋の道」を歩く 新發田市観光協会、安兵衛生誕地祭り実行委員会	富岡副理事長
5.17	第68回月一勉強会 ①不破数右衛門について ②読付「武庸筆記」最終回	港区生涯学習センター
5.31	中央義士会理事会 出席6名	港区生涯学習センター
6.14	第69回月一勉強会 ①小野寺十内について ②読付「佐藤條右衛門覚書」	港区生涯学習センター
7.12	第70回月一勉強会 特集「ザ・プレミアムよみがえる江戸城」松之廊下現場検証	港区生涯学習センター
8.9	第71回月一勉強会 ①木村岡右衛門について ②読付「佐藤條右衛門覚書」	港区生涯学習センター
9.13	第72回月一勉強会 ①奥田孫太夫について ②読付「佐藤條右衛門覚書」	港区生涯学習センター
9.17	群馬県立文書館 「堀内伝右衛門覚書」調査	中島理事長
10.4	第73回月一勉強会 ①堀部弥兵衛について ②読付「佐藤條右衛門覚書」	港区生涯学習センター
10.6	クラブツーリズム 勉強会	中島理事長 新宿区西新宿
10.19	「元禄赤穂事件の記録」発売	
10.19	「大石内蔵助ら切腹の地」再版発売	
11.8	第74回月一勉強会 ①再度・寺坂逃亡説 ②読付「佐藤條右衛門覚書」	港区生涯学習センター
11.24	赤穂義士講演会	赤穂市 関西福祉大学 中島理事長
12.12,13	両国元禄市出店	両国旧吉良邸跡
12.14	赤穂義士追憶の集い	泉岳寺

創立107年記念

第13回忠臣蔵博士試験問題

[受験資格について]

- ・ 受験料は無料ですが、受験資格は会員に限ります。

[解答票の配布について]

- ・ 第 13 回忠臣蔵博士試験の解答票は、勉強会などで配布致します。別途必要な方は本部（FAX 048-973-3790）までご連絡下さい。F A X でお送りいたします。または、メールで中央義士会のメール（chuogishikai@tokyo.email.ne.jp）までご連絡下さい。折り返しメールでお送りいたします。

[解答票の送付]

- ・ 解答票は本部まで（FAX 048-973-3790）F A X で送付下さい。

[解答に際しての注意事項]

- ・ 試験問題の解答を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- ・ 同じく、会員同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げたいのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- ・ 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題がたくさん出題されています。
- ・ 文章での解答については、解答者が理解しているかを判断基準にさせていただきます。
- ・ 文章での解答については、要領を得ない場合は失点とします。
- ・ 解答がないと思われる場合は「なし」とだけ記入して下さい。
- ・ 文章を求める答えで、別紙を添付しても構いません。
- ・ **最終提出日は、平成 28 年 10 月末日です。**

平成27年12月

第 1 問	「易水連袂録」の作者を天野弥五右衛門と想定した場合、少し無理があるとすれば、その理由を一つ挙げて下さい。（つながる文章がない、以外の答えを書いて下さい）
第 2 問	羽倉斎と吉良上野介の交際を示す史料をご存じでしたら一つ示して下さい。
第 3 問	羽倉斎が大石三平に宛てた元禄十五年 12 月 14 日の手紙を発見して、世に発表した方はどなたでしょうか。
第 4 問	羽倉斎が秘密裏に動いて、大石たちに加勢していたのですが、元禄期においては関係者以外、世間では誰一人知りませんでした。時が過ぎ、羽倉斎の動きに気がついた方がおります。どなたでしょうか。
第 5 問	羽倉斎と大石内蔵助との交際を示す史料をご存じでしたら示して下さい。

第 6 問	大石内蔵助と山鹿素行との師弟関係を示す史料をご存じでしたら示して下さい。
第 7 問	討入り後、多くの学者たちの間で義士論論争が交わされたかのように、現在論ぜられていますが、それはなぜでしょうか。
第 8 問	討入り前から「義士殿」と同志たちから呼ばれていた方がおりましたが、どなたでしょうか。
第 9 問	討入り後、義士たちが泉岳寺へ引揚げてきた時、大石内蔵助が泉岳寺側に 200 両寄進したと書いてある当時の史料があります。何という史料でしょうか。
第 10 問	俗書「古筆集」によりますと、大石内蔵助が茶屋遊びをしていた笹屋の女将が店を取り仕切っていたとありますが、その女将の名を書いて下さい。
第 11 問	大石内蔵助が笹屋で茶屋遊びをしていた時、天井に「里気色」という一句を書いたとされ、その天井板が近年までありましたが、どの時点で見られなくなったのでしょうか。
第 12 問	大野九郎兵衛が、伴閉精という変名で仁和寺近くに住み、東山の黒谷に葬られたことは、ある方の書状に示されていますが、その手紙を書いた方の名はなんというのでしょうか。
第 13 問	近年（平成に入ってから）赤穂義士に関して、名著を書かれた、ある大学の教授がおられます。どなたでしょうか。
第 14 問	泉岳寺の 48 個目の「村上喜劔」といわれている墓は、宇都宮の僧「岱じゅん」が建てたのですが、本当は、どなたを供養するために建てたのでしょうか。
第 15 問	下記に義士寺坂吉右衛門の知り合いがいますが、どなたでしょうか。 ①山口武助 ②池上藤蔵 ③梅津半右衛門 ④松田友八
第 16 問	童名を「武蔵」といわれた方はどなたでしょうか。
第 17 問	「桂山」とはどなたのことでしょうか。
第 18 問	「実相院宗禅居士」とはどなたの戒名でしょうか。
第 19 問	「土芥寇讎記」の内容が信じられない所以がどこにあるのか示して下さい。(譜代に世辞、外様に辛い以外でお答え下さい)

第 20 問	汗牛充棟といわれる程、世に元禄事件の冊子は出版されていますが、梶川與惣兵衛日記の 3 月 14 日の文章を、読み下している冊子があればその名を挙げて下さい。(義士会以外の本)
第 21 問	江戸時代の江戸城図に「松の廊下」が存在するのか知っていたら示して下さい。「松の廊下」の表示が正しいとしての質問です。
第 22 問	浅野大学が兄内匠頭のことを、「性格が急な人で、賄賂を贈ることを嫌いな人である」と語っている書物名を挙げて下さい。
第 23 問	吉良家代々、将軍家の使いで度々禁裏を尋ねておりますが、その旅費・経費は公費として支払われるのでしょうか。
第 24 問	泉岳寺へ引揚げてきたのは、45 士で、寺坂が境内へ入ったのは「白明話録」で伺えますが、その先の浅野内匠頭の墓前まで行ったことを示す史料がありましたら、挙げて下さい。
第 25 問	寺坂吉右衛門が逃亡者でないとする、あなたなりの決定的証拠を挙げて下さい。
第 26 問	大石主税を一足先に江戸へ下らせたことを人質のために差し出したとする主張がありますが、あなたはどのように思いますか。
第 27 問	松之廊下での浅野内匠頭の一言「この間までの遺恨覚えたか」の言葉は本当にいったのでしょうか。あなたはどのように判断されますか。
第 28 問	綱吉時代は 28 年間続きましたが、あなたはどのように思いますか。
第 29 問	「江赤見聞記」が刊行物になって初めて一般の方々の目に触れるようになった経緯を簡単に示して下さい。
第 30 問	大野宇右衛門という方について、知っている限りのことを簡単にまとめて示して下さい。

注意：・文章での解答が多いので、月一勉強会、水曜ゼミなどでなるべく解説をして参ります。勉強会の出席を第一と考えて頑張ってください。

・解答が的確でない場合、△印が付く場合がございます。△が2つで1点減点となります。

・問題そのものについてのご質問は幾つでも受け付けますので、何度でも聞いて下さい。

中央義士会

評議員 三輪 三郎

川崎市麻生区在住

中央義士会

勝田新左工門子孫

評議員 勝田 芳造



東京都足立区在住

中央義士会

評議員 成清 寛徽

千葉県浦安市在住

中央義士会

常務理事 荻原 栄

中央義士のホームページは <http://www.chushingura.net/>

中央義士会

副理事長 富岡 克

東京都中央区在住

中央義士会

大内 満利子

仙石伯耆守子孫
埼玉県在住

中央義士会

評議員 上原 益雄

東京都練馬区在住

中央義士会

評議員 金子 堅一

東京都荒川区在住

新大石内蔵助の生涯

中島康夫 著

1800円(税込)

「日常、政治でも、事件でも、事故でも、どんなことであれ、先ず、真実を知らなければ何も始まらない」(あとがき)。50年にわたる研究成果の決定版。史料主義でまとめた、誰もが初めて知る元禄事件の真実。大石内蔵助の生涯を追



新大石内蔵助の生涯

誰もが初めて知る元禄事件の決定版。史料主義でまとめた真実。誰もが初めて知る元禄事件の真実。大石内蔵助の生涯を追

いながら、これまでほとんど取り上げられることになかった、元禄事件の影で動いていた旗本・天野弥五右衛門の正体に迫る力作。「四十七士のプロフィール」。「大石内蔵助を中心にした年譜」などのコーナーも充実。これ一冊で、本当の忠臣蔵のすべてが分かる。1800円(税込)。購入希望者は送料350円を加えて、郵便局の払込取扱票(青色)で(加入者名) 中央義士会 (口座番号)「001300054568」に、通信欄には「生涯」と部数を明記のこと。

「大石内蔵助ら切腹の地」

再版しました

目次

はじめに	中島康夫
討入り以後	中島康夫
白金屋敷図面	中島康夫
細川家	荻原 栄
下屋敷の歴史	荻原 栄
細川家白金の下屋敷の歴史	荻原 栄
細川越中守綱利	中島康夫
堀内伝右衛門勝重	中島康夫
安場一平久幸	中島康夫
荒木十左衛門政羽	中島康夫
堀内伝右衛門覚書	中島康夫
旧細川邸内義士 『大石内蔵助等十七士自刃の跡』	井筒調策
工事竝建碑経過報告	井筒調策
泉岳寺につぐ義士史蹟	井筒調策
旧細川邸の工事進捗	井筒調策
義士史蹟旧細川邸施設工事見学	井筒調策
旧細川邸内赤穂義士史蹟碑完成式	井筒調策
大石内蔵助ら切腹の図の原図新出	大野瑞男

お申し込みは左記へ郵便局から払込票で

一冊 千円十郵送料二百十五円

中央義士会 ○〇一三〇〇—〇—五四五六八

赤穂義士切腹311年記念号

大石内蔵助ら切腹の地

細川家と赤穂義士

監修 中島康夫



財団法人 中央義士会

平成 27 年 10 月 18 日再版

★新入会員紹介★(敬称略)

地区	会員別	芳名
姫路市	一般	伊東 良昭
横浜市	一般	今田 英一
川崎市	一般	遠藤 茂樹
相模原市	一般	菅野 三津男
西東京市	一般	芝原 雅人
西宮市	一般	菅谷 修
港区	一般	菅谷 定彦
中央区	一般	鈴木 理英子
大和市	一般	中山 豊
岐阜県	一般	宮地 ひとみ
世田谷区	一般	村山 優子
新座市	一般	室井 孝太
文京区	一般	馬上 純子
江東区	一般	横尾 桂一
練馬区	一般	渡瀬 大西洋
府中市	一般	坂藤 美子
広島市	一般	佐伯 恵子
佐倉市	一般	藤本 隆夫
浜松市	一般	渥美 晶子

編集後記

中央義士会が毎月第一又は第二日曜日に行っております「月一勉強会」でございますが、これは、生涯学習科と同じ考えで、講師の中島が倒れて動けなくなるまで続きます。ですから、受講者の皆様は、ご自分が出席できる時に、気楽に勉強していただきたいと願っております。この学科で使われている真説「義士銘々伝」は、昭和時代の渡辺世祐博士(東大教授・当会会長)の語録を井筒調策理事がまとめ、当会会報「義士精神」に載せた当会のみが保存している、この世に一つしかない資料です。他の教室で聞ける資料でもございませんし、他の先生に語れる内容でもございません。月一勉強会の内容を知らずして、元禄事件の研究が先に進めましょうか。いわゆる「孫引」「受け売り」の授業とは違います。我慢して一年間は聞いていただければ、自然と解って参ります。疑問がありましたら、どんどん質問しましょう。

只今、クラブツーリズム社と提供して、「忠臣蔵講師」の本格的指導を始めました。皆様どうぞ、お気軽に参加して下さい。

編集者

中島康夫(企画・編集・検証)
 荻原 栄(編集) 富岡 克(校正)
 勝田芳造(校正) 三輪三郎(校正)
 (株)正大印刷社(印刷)